

# 黒埼町の 今昔

町史編さん課

## 緒立温泉を訪ねる(二)

### 明治時代、質素な浴場で男女混浴

#### 三十八年に本格的な湯治場を造る

明治初期に年間一千五百人の湯治客

前号で紹介したように緒立鉱泉の始まりは江戸時代末

期の文久三年(一八六三年)である。近隣から湯治客が押し寄せたという。その数は明治初期で年間一千五百人であ

る。これは明治十年(一八七三年)黒鳥村から県知事あてに提出された「冷泉場反別取調書」でわかる。明治五年(一八七二年)から明治九年(一八七六年)まで五年間の緒立鉱泉浴場の入湯者数が記されている。それによれば、明治五年が

一千四百三十九人、以下六年一千五百七十五人、七年一千三百八十五人、八年三百五十二人、九年一千二百九十八人である。明治八年が極端に少ないのは西川切れ水害と思われる。同調書にもそのことが書かれている。

また、緒立鉱泉は冷泉であったが、同調書に大量のまきが使用されていると記されているので、このころ既に水浴から温浴に変わっていたことが裏付けられる。

明治二十年、緒立温泉の泉質と効能の調査

緒立温泉の泉質と効能について初めて調査されたのは明治二十年(一八八七年)である。黒鳥村が県に緒立温泉の正式開業を許可してもらった

め、泉質の分析を新潟医学学校(今の新潟大学)の井上敏といる人に、効能を新潟病院の院長長谷川寛治という人に依頼している。

その「緒立冷泉分析成績概略」は次のとおりである。

「淡褐色ニシテ微温ヲ帯ブト雖モ之ヲ濾過スル時ハ無色透明トナリ無味ニテ塩味ヲ有ス 化学上の反応ハ亜兒加里性ナリ(以下略)」

また、効能は「第一慢性皮膚病、第二子宮病、第三胃弱、第四貧血症、第五慢性リウマチ、第六腰痛、第七神経弱、第八諸種ノ神経痛、第九関節諸病、第十一慢性咽喉加答兒」となっている。今の泉質もこの調査とほぼ同じであり、効能も多くの人がこれを証明している。

最初の浴場は二十坪、脱衣場はなく男女混浴

「冷泉場反別取調書」と「緒立冷泉分析成績概略」には浴場の場所が記されている。緒立八幡宮の境内で、八幡宮本殿に向かって左側、今の社務所の近くにある源泉井戸の辺



今も残る源泉井戸

りだ。浴場の建物は約二十坪くらいで、脱衣場はなく浴室に男女の区別はなかった。浴槽は六尺(一・八尺)四方の正方形のもので二つあった。これは前述した二つの文書から考察できる。これが初代緒立温泉の湯治場である。湯治客は八幡宮を散歩したり、本殿で休んだりして湯治を楽しんだという。

明治三十三年湯治場を改築三十八年移転

明治三十三年(一九〇〇年)五月、国から十二歳以上の男女混浴の禁止が通達された。緒立の浴場は男女混浴であるため、浴室の改築を行った。改築はなぜかうまく進まなかったらしく、混浴期間の延長願いを県に六月と九月に出している。結局、九月末に改築が終わったらしい。

その五年後の明治三十八年(一九〇五年)には湯治場を移転した。おそらく、老朽化と本格的な浴場を造りたかつたためと思われる。場所はやはり境内の中だが、今度は本殿に向かって右側である。前

号の略図の場所である。これが二代目の湯治場で、昭和四十六年ごろまでこの場所にあった。建物は前号の写真で紹介したように昭和二年に新築されている。黒鳥村の財源の一部になった緒立温泉

緒立鉱泉は江戸時代末期にわき水で発見されたと伝えられるが、明治後期には湯治場の移転に伴い、つるべ式の源泉井戸を掘り、鉱泉をくみ上げた。大正時代は手押しポンプになったが、大変な重労働で、浴槽をいっばいにするには一時間もかかったと聞く。自動式ポンプに変わったのは昭和の初めだそうである。(久住政治さん、緒立、九十二歳の話)

緒立の湯治場を運営したのは黒鳥村である。鉱泉をくみ上げ湯をわかつ火夫は給料を支払って雇ったが、番台に座り湯銭を取る番人二人は毎日村から割り当てて出した。二人のうち一人は五人組の組親で、もう一人は村人全員の順番制であった。

湯銭は八幡宮の社務所に納め、一部は黒鳥村の財源になった。また、低利で村人へ貸し付け喜ばれたという。(江端義栄さん、黒鳥、六十四歳の話)

〔執筆・宮田栄門〕以下次号

湯治客がよく休憩した緒立八幡宮の本殿

